主　論　文　要　旨

報告番号	甲 ㊁ 第　　号	氏　名	熊　﨑　博　一

主 論 文 題 名

Sex differences in cognitive and symptom profiles in children with high functioning autism spectrum disorders

（高機能自閉スペクトラム症児における認知及び症状プロフィールの性差）

（内容の要旨）

自閉スペクトラム症（Autism spectrum disorder :ASD）は有病率に顕著な男女差を示し、男性の方が有病率は高いと報告されている。女児の高機能ASDでは男児の高機能ASDと比べて行動の表現型は異なり、行動化の問題や異常なステレオタイプな行動が少なく、社会スキルや言語能力が優れていることが多いこともあり診断が見逃され、遅れる傾向にある。女児の高機能ASDをいかに早期発見するかは今日の大きな課題となっている。現在までに高機能ASDの性差に関する研究は少数あったが、その結果は一致したものとなっていなかった。現在までの研究は対象の年齢幅が広かったこと、思春期以降を対象としていたことが大きな要因として考えられた。

5歳～9歳という思春期前の狭い年齢層を対象とすることでASDの特徴の本質に迫ることが出来ると考え、知能検査であるウェクスラー児童用個別知能検査（Wechsler Intelligence Scale for Children-Third Edition: WISC-Ⅲ）、及び自閉症特性に関する検査である小児自閉症評定尺度Childhood Autism Rating Scale-Tokyo Version （CARS-TV）を行った。女児の高機能ASD20名、男児の高機能ASD26名を対象とした。WISC-Ⅲプロフィールについては全体項目及び下位項目において男女の間に有意な差を認めなかった。CARSプロフィールについては“身体の使い方”（$p = 0.03$）・“物の使い方”（$p = 0.01$）・“活動水準”（$p = 0.02$）において男児の高機能ASDは女児の高機能ASDと比べ重症度が高いとの結果であった。“身体の使い方”は身体の動作の協応と適切さ、“物の使い方”は物に示す興味と扱い方、“活動水準”は過剰な活動や無気力の程度を意味する。男児の高機能ASD に於いて、CARSプロフィールの“身体の使い方”・“物の使い方”・“活動水準”が女児の高機能ASDと比べ重症度が高いという結果は先行研究の結果と一致するものであった。一方で女児の高機能ASDでは男児の高機能ASDと比べ“嗅覚・触覚・味覚反応とその使い方”において重症度が高いとの結果が出た（$p = 0.03$）。CARSプロフィールにおける“嗅覚・触覚・味覚反応とその使い方”とは味覚、嗅覚、触覚刺激に対する反応や異常な行動を示す。本研究に参加した女児の高機能ASDの多くは、チーズやたばこの煙といったある種のにおいを嫌がる、あるいは極端に避けるといった反応を示した。

現在まで高機能ASD児の感覚の問題における性差についてはほとんど報告がなかった。ASDに於ける感覚の問題は、1943年にカナーが行った世界で初めてのASDの報告にも記載されているが、最近までは軽視されてきた。ASD児の感覚の問題の知見が積み重なってきたこともあり、世界的に使用されている最新の精神疾患の診断分類Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders version 5（DSM-5）でようやく診断基準に取り入れられた。今後高機能ASDの感覚の性差について注目が集まり知見が蓄積されることが期待される。ASDの診断評価に味覚・嗅覚・触覚といった感覚の問題を考慮することが、高機能ASD、とりわけ女児の高機能ASDの早期発見につながり、サービスや治療効果を高めることにつながると考えている。